ミスあれこれ

さる6月のダブル選挙のとき，投票所の入場券が1枚多く郵送されてきた．よく見ると，宛名はコンピュータのカナ文字で，私の姓からカナ1文字を除いた有権者のものである．実はそろそろこの原稿として，ミスについて書こうかと思いめぐらしていたときである．数日後，今度は他人宛の選挙用ハガキが迷いこんできた．宛名は漢字で，氏名が1字違いである．近くで大規模な宅地開発が進み，人口急増に郵便局の対応がおくれ，選挙というピーク時にこのようなミスとなって現われたものであろう．

この2度の誤配の間に，コンピュータ・ミスの事件が2つ起った．1つは，私の身近かな所で，オンライン・システムがダウンしたことである．もう1つは，米ソの規模でのヒヤッとする話である．前者は，オンラインのシステムの中で，自己診断してミスを見出したが，それを原因箇所へもどし，そこでミス部分を切りはなすべき所を，ようもどさずにお手上げになってしまった．しかし，暴走することもなく安全サイドに働いてシステムを止めたのであった．人間の設計ミスをコンピュータ・システム自身が無難にとめた例で，即刻回復できた．問題は後者で，ご記憶の方も多かろうと思うが，要点は次のとおりである．

6月3日，米国防総省地下室の国家戦闘司令センターの表示スクリーンに「ソ連が米本土に向けミサイルを発射した」との警報が出された．直ちに，核爆撃機と大陸間弾道部隊が核報復の緊急配備につき，大統領の「ゴー」サインを待つのみとなっていた．幸いにも，3分後に，この「ソ連の核攻撃」はコロラド州にある北米防空司令部のコンピュータ・ミスによることがわかり，事無きを得たという．

しかも，この緊急配備の事態をソ連は敏感に察知しており，タス通信は「数分間，世界が核戦争の真ただ中に置かれ，ソ連は米国の核のシャワーをあびる寸前だった」と米国を非難している．ソ連も米国の緊急配備が誤報にもとづくことを知ったからよいようなものの，1歩誤まれば，ソ連も米国の緊急配備に対応して，緊急発展しかねない状況である．

さらに，3日後の6月6日にも，同じ誤報が発生している．今度は，特殊な監視装置で故障したコンピュータを調べていたため，米軍は即座に同一のコンピュータの故障による事故であることが判明して，戦略爆撃機はエンジンを始動しただけで，緊急発進もしなかったという．

2回目のとき，米国防総省のスポークスマンは，欠陥箇所が究明されるまで，このコンピュータの使用を停止する．また，警報が鳴っても，これが大統領に報告され，その情報の確認を少将以上の高級将校により行なったうえで初めて，核報復を行なわれる仕組みになっているので大丈夫だと強調した由である．

この新聞記事から推察すると，米国の軍用システムといえども，誤動作したコンピュータをそのままの状態で使用して，誤動作の原因をつきとめるという方法をとったように思われる．いわば，おとり捜査でことが再現するのを待つやり方である．私のささやかな経験からも，情報不足のときは，コンピュータのミス原因を究求するとき，もし同じようなミスが起きても他へは波及しないように，リカバリーできる体制を整備しておき，同種のミスの再発を待って情報を収集し，原因を明らかにするという方法をよく用いる．英知を集めた巨大な軍事システムにおいても，この方法をとったなと，ほほえみを覚えはしたが，どんなリカバリー体制のもとで再発を待ったのだろうか．おそらくこのリカバリー体制の中には，人間系も多く含まれていると思われるが，何かのはずみで判断の錯誤があり，それが連鎖反応を起すとしたら，誠に肌寒いお話である．

人間の特性として急な変化には敏感だが，なだらかな変化には次第に感覚が鈍化してゆく．また思い違いもよくするし，さらに悪いことには，故意に間違えるという人間の特権まであって，性善説だけでは対応できない．性悪説の立場から見ても，健全なシステムとなっていなければならない．常に思うのは，人間にたよる所には，しつけのみでなく，しくみも必要であり，人間はミスすることを前提としたシステムづくりが大切であり，それが，なかなかむつかしい．

ここまで書いたときに，電話のベルがなった．すわ，何かミス発生か，いや，「次の日曜にミス○○の撮影会にいかないか」という友人からの誘いであった．ミスはミスでも，こちらのミスは大歓迎である．（大悪）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．